宮河内の城（砦（とりで））跡について

村上 浩明

宮河内の阿蘇入集落に、現在でも”ジョウ”と呼ばれている山があり、太閤検地帳にも”城（じょう）の下”の地名が書かれています。

山の所有者の家系図には”宮川内城”の記載もあります。

この山が果たして城であったか、いつ造られたかは明確にはわかりませんが、人工的に加工されていることは間違いありません。

加工の跡としては、人が登れないように山の斜面を切削して断崖を造っていたり、建物を建てられるように削平（さくへい）して平坦にしていたり、あたかも城の切岸（きりぎし）や曲輪（くるわ）を造ったように見受けられます。

この山が本当に城（砦）であったか、考察していきます。

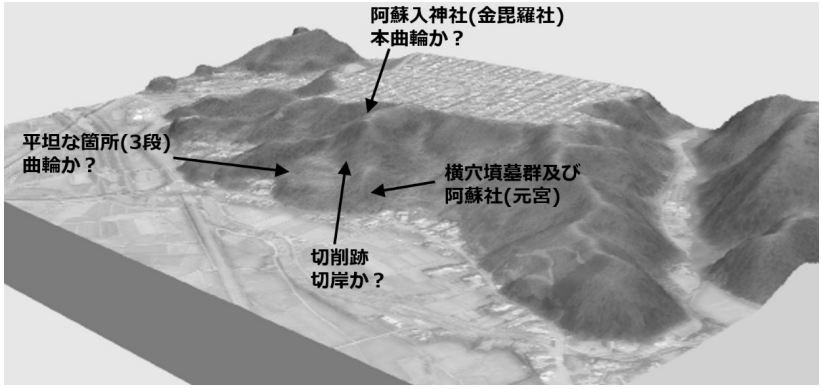

図-1 地理院地図 土地の凹凸図の 3D 像

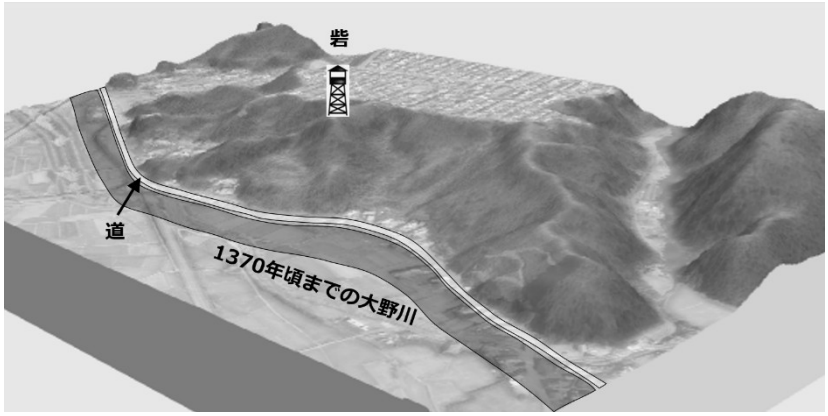

図-2（土地の凹凸図の 3D 像に大野川の旧河道と道を加筆）

大野川は 1370 年頃まで丹生台地の裾野に沿って流れ、その川岸に道があったと推定され、本曲輪の場所に砦を築けば川や道の通行を監視することができます。

ある方の家系図には、図-1 にある阿蘇社（元宮）をこの地に建てた時この地は”見附（みつけ）”と呼ばれていたことが書かれています。

東京にある”赤坂見附”が有名ですが、見附とは、見張りの番兵がいる軍事施設のことです。

何もなければ”見附”とは書かれていないはずなので、私は、ここに砦があったと考えています。

その理由の一つとして、隣の”浄土寺”集落にあった寺院が挙げられます。

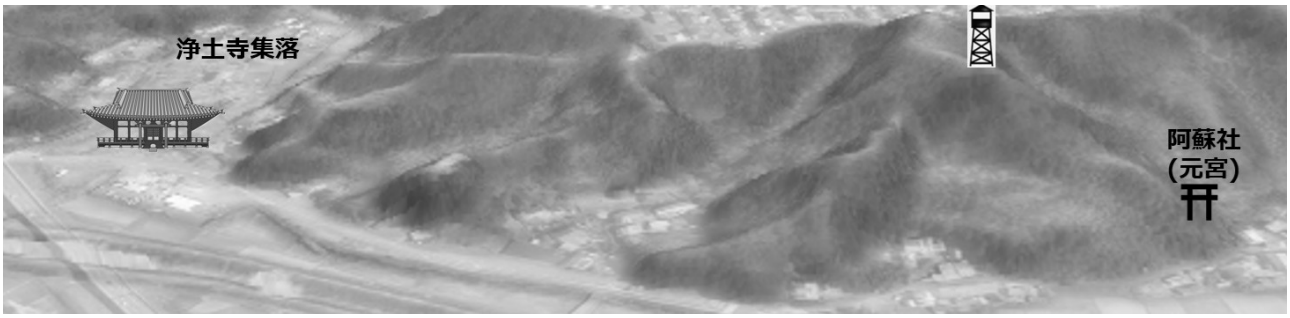

図-3

浄土寺集落に最初に寺院（臨済宗浄土寺）が建立されたのは 1300 年代中頃であることは判っていますが、私は 1352 年に 8 代当主大友氏時（うじとき）の経済的支援によって建立されたと考えています。

現在の浄土寺の地は、氏時の直轄地の一つである丹生荘の玄関口に位置し、もう一つの直轄地の臼杵荘に行くときは、九六位連山を越得なければなりませんので、織田信長にとっての本能寺のように、氏時はこの寺院を休息場や宿泊場とした可能性が考えられます。

そして警備として、特に南から大野川を船で下ってくる怪しい者がいないかを見張るために、寺院建立と同時期に阿蘇入に砦を築いたと考えます。

その後、天正十四年(1586)12 月、薩摩軍が戸次川の合戦で大友に勝利し鶴崎に攻め上った時にこの砦で戦いがあったと考えられる形跡があります。

戸次川の合戦で薩摩軍が勝利したのが 12 月 12 日で、その後薩摩軍は松岡から高田を通り、鶴崎で吉岡妙林尼と戦ったのは翌日の 13 日と言われています。

しかしながら、この間九六位山円通寺を含めた大野川流域の寺社を悉く焼き払って行ったことが伝わっています。

当時九六位山に行くには、杵河内から九六位山に直接行く道が主要道だったようですので、薩摩軍は幾つかの部隊に分かれて進軍したと考えられ、宮河内を通った部隊もあったと考えます。

13 日に妙林尼と戦ったのは、最初に着いた部隊だったのでしょう。

前述した、砦がある山の持ち主の過去帳には、天正十四年(1586)12 月 15 日に亡くなっている方がいます。

私は、これは偶然ではなく、この砦で戦って戦死されたと考えます。

鶴崎でも薩摩軍に備えたように各地域でも薩摩軍に備えたことでしょう。

宮河内の砦でも防御性の向上をはかり、加工したことが考えられます。

最初に砦が築かれた時はどの程度の規模だったかはわかりませんが、現在の砦跡は、薩摩軍との戦いに備えた加工も含んでいると考えます。

大友氏時以降の阿蘇入集落と浄土寺集落についても記述します。

阿蘇社（元宮）は 10 代大友親世（ちかよ）の時代、現在でも犬飼町の黒松にある阿蘇社から分祀（ぶんし）されたようです。

犬飼のある井田郷は延文六年(1361)から当時南朝側であった阿蘇氏の知行地となっていましたが、永和四年(1378)北朝側の今川了俊によって島津伊久（これひさ）に与えられました。

島津氏にとっては阿蘇氏の象徴である阿蘇社が領内にあることが不都合と考えて、親世に他の地に移して欲しいと頼んだのか、親世が永和四年(1378)自領である丹生荘のこの地に分祀したのでしょう。

その後、応永七年(1400)には 11 代大友親著（ちかつぐ）によって火振阿蘇神社が丹生荘一之宮として建立されます。

火振阿蘇神社の元宮と伝えられている阿蘇入の阿蘇社は、階段を上った少し高いところにあるのはなぜでしょうか。

私は、阿蘇入の阿蘇社が建立される直前に大野川の流路が変わる程の氾濫があったと推測しており、それは永和元年(1375)だったと考えています。

理由を書くと長くなるので省略しますが、氾濫の影響を受けないように、山の中腹にあった古墳を壊して阿蘇社を建立したのだと考えています。

現在阿蘇社にある石棺の石は、壊したときに出てきたものでしょう。

また、火振阿蘇神社の地は、それまで大野川の中だったのが、流路が変わったことによって地表に出てきた場所です。

親著は、水害除けの祈りも込めて火振に建立したと考えます。

そして浄土寺の寺院ですが、私はこの時の氾濫で流失したと推測します。

1352 年に建立、1375 年に流失とすれば 23 年間だけの存在となります。

その後浄土寺にあった寺院は、15 世紀になって久所に建立される大恵寺に引き継がれます。

また、浄土寺にも明応九年(1500)再び浄土宗浄土寺が建立されますが、1 年後には 18 代大友親治(ちかはる)が、現在もある生石(いくし)の浄土寺に移しました。

移した理由を推察するに、臨済宗浄土寺の寺院は主な建物は流失していましたが、幾つかの建物が残っていたため、満誉上人がこの残った建物を補修しながら堂として使っていたのではないかと思います。

それを見かねた親治は、川の氾濫の影響の少ない、府内に近い生石に建立したのでしょう。

南北朝時代の大友氏は、交通の要衝である宮河内の発展に力を注ごうとしたのですが、大野川の氾濫のため思った程発展しなかったのでしょう。